

◎ 令和4年度◎

東京都小学校特別活動研究会

研究発表大会

本研究会は、今年度、創立60周年を迎えた。令和4年度の研究発表大会は、創立60周年記念大会として、去る2月24日(金)に目黒区中小企業センター(区民センター)ホールを会場として開催された。今年度は、「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす特別活動」を研究主題とした3年目の研究であり、昨年度までの研究をもとに、学級活動部、児童会活動部、クラブ活動部、学校行事部の4部が、研究の視点を共通のものとして、感染症対策を講じながら研究をすすめてきた。研究発表大会の概要は、次の通りである。

創立60周年を迎え、特別活動の意義・重要性を再確認した大会

大会は、開会の言葉に続き、秋山会長から次のような内容の挨拶があった。

コロナ禍であったここ数年は、学校の様々な教育活動が大きく制限されてきた。特に集団活動である特別活動は、実施が困難であった学校が多くあった。一昨年度は、研究授業が実施できず、それぞれの学校でできることを実践しようと様々に模索をし、それを情報共有しながら有効な手だてを探ってきた。昨年度と今年度は、会場校のご理解とご協力により、何とか研究授業を実施することができた。また、一人1台の情報端末を効果的に活用する方法についても試行錯誤を重ねてきた。正に、特別活動の方法原理である「なすことによって学び」、新たな知見を得てきたところである。

コロナ禍を通して多くの学校関係者や子供たちが実感したことに、「学校生活における特別活動の意義・重要性」がある。学校生活への意欲を高め、主体性や責任感、協働性、粘り強さなど、特別活動だからこそ子供たちが身に付けられる資質・能力が実に多かったことを改めて実感した。東京都のどの小学校・学級においても質の高い特別活動が実践され、特別活動を通して身に付けるべき、多様な他者と協働する力や、自ら課題を見出し、解決のために話し合い、合意形成を図ったり意思決定したりする力、自己実現を図ろうとする態度などを育成していくことが本会の使命であり、そのために、指導法についての実践的な研究をすすめ、その成果を広く発信することが本会の大切な役割であると考えている。

結びには、本会の60年の歩みは、諸先輩方の特別活動に対する熱い思い(特活愛)に支えられてきたことを改めて認識し、今日を新たな契機として、熱心に特別活動の授業改善に取り組む仲間を増やし、多くの学校で取り組める有効な手だてを積極的に発信していきたいとの話があった。ご講演をいただいた文部科学省初等中等教育局視学官 安部恭子先生、東京都教職員研修センター 関 聡司指導主事、目黒区教育委員会 寺尾千英教育指導課長をはじめとしたご来賓の皆様にご挨拶の意を伝え、基調報告、研究発表、記念講演へと会が進んだ。



会長 秋山美栄子  
(目黒区立下目黒小学校長)

都小特活

第112号

東京都小学校特別活動研究会

令和5年3月発行

発行人  
秋山美栄子

研究発表大会次第

- 進行 庶務部長 笹間伸也
- (1) 開会の言葉 副会長 石田孝士
- (2) 挨拶 会長 秋山美栄子
- (3) 来賓挨拶
  - 東京都教職員研修センター 指導主事 関 聡司様
  - 目黒区教育委員会指導課長 寺尾千英様
- (4) 来賓紹介 副会長 出町桜一郎
- (5) 基調報告 研究部長 平松隆行
- (6) 研究発表 司会 研究副部長 田村亜紀子
  - 学級活動部  
「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす学級活動」
  - 児童会活動部  
「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす児童会活動」
  - クラブ活動部  
「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かすクラブ活動」
  - 学校行事部  
「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす学校行事」
- (7) 記念講演  
『よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす特別活動』  
文部科学省初等中等教育局視学官 安部恭子先生
- (8) 閉会の言葉 副会長 橋本弥記

◎ 学級活動部 ◎

『よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす学級活動』

1 発表者

- 岸野 航太 教諭 (日野市立日野第五小学校)
小山 晴美 主任教諭 (西東京市立保谷小学校)
土屋 菜々子 教諭 (中央区立月島第二小学校)
川村 容平 主任教諭 (町田市立七国山小学校)
細貝 俊稀 主任教諭 (立川市立第五小学校)

2 研究発表

(1) 研究内容

学習指導要領には、「学級生活の充実と向上を目指し、他者と協力したり、個人として努力したりしながら、自主的・実践的に取り組むことにより、活動することの楽しさや達成感・達成感を得たり、自己有用感を高めることにつながる。」とある。特別活動がこれまで教育課程上果たしてきた役割を踏まえて、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の3つを視点としつつ、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3点の柱に沿って、資質・能力が整理されている。

本研究会の主題である「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす特別活動」を受け、学級活動部では、「自己のよさを生かす」とは、自分の興味のあることや自信のあることが分かること、自分の興味があることや自信のあることを行い、友達や学級に貢献すること、また、自分の思いや願いを叶えられること、学級の中に自分の居場所や役割があることと捉えた。

学級活動部においては、学級という集団の中で、様々な問題を自分たちで見付け、解決方法について話し合い、合意形成を図る。そして、合意形成したことをもとに実践し、解決につなげていく中で、自他のよさや可能性を広げたり、活動することへの達成感や充実感を得たり、自己有用感を感じたりすることができる。そして、その経験の積み重ねが生徒にわたって、集団や社会の一員として、また社会の形成者として、たくましく生き抜く資質や能力へとつながると捉え、研究を深めてきた。

主題を設定して3年目となる今年度は、学級活動における「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」を捉え直し、本時の活動(解決方法の話し合い・解決方法の決定)における児童の言動を具体的に価値付けていくとともに、指導の充実や指導と評価の一体化を図った。

- 視点1 「みんなとともに生きていく力を育てる指導の工夫(人間関係形成)」
視点2 「よりよい集団をつくらうとする力を育てる指導の工夫(社会参画)」
視点3 「なりたいたい自分に向けてがんばる力を育てる指導の工夫(自己実現)」

(2) 3つの視点の有効な手だて

- ① 学級の全員が納得する合意形成の工夫
② 「学級の目標」の可視化と実践への工夫
③ 活動のよさを認め、価値付ける終末の助言の工夫
④ 個々の活動を価値付けたカード作成と可視化の工夫
⑤ 「振り返り」の時間や、振り返りカードの工夫
⑥ 自分や学級全体の成長に気付く振り返りの工夫
⑦ 計画委員会を活性化させる指導の工夫
⑧ 発達段階による「とらえておきたい『学級会』の観点」などによる実態把握の工夫
⑨ 前回の学級会を踏まえた、次回の目標設定の指導の工夫
⑩ 実践活動において、自分や仲間のよさを実感し、自分を見つめ直す工夫

(3) 検証授業

- 検証授業1 9月27日(火)日野市立日野第五小学校
第6学年1組 岸野 航太教諭 議題「クラス運動会をしよう」
検証授業2 10月28日(金)西東京市立保谷小学校
第1学年3組 小山 晴美主任教諭 議題「みんなで やりたいことを決めよう」

3 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

- ・コロナ禍で、これまでの既存の方法や概念を変更することを余儀なくされたが、模索を繰り返すことで、ICT機器の活用が軌道に乗り、改めて短冊、名前磁石の活用等、基本的な方法に目を向けることができた。また、制約がある分、児童の「自分たちで話し合っただけでいい」という意欲が高まり、よりよい話し合いの方法が生み出される結果となった。(視点1)
・研究授業の前に、十分に手だてについて協議し、授業者一人の負担とせず、多くの目で視点を焦点化して検証授業に臨むことができた。そうすることで、より有効な手だてが明らかになり、児童の変容を確認することができた。(視点2)
・学級として「育てたい力」を明確にすることで、学級活動部としての蓄積された提案や資料を活用して、自分の学級にあった手だてを即時的にとることができた。(視点3)

(2) 研究の課題

- ・学習者用端末の活用が常態化していく現在、学級会での有効な使用方法、それに伴う課題を、児童そして活用していく教員にも示していく必要がある。(視点1)
・これまで研究で積み重ねたことを受けて「自主的・実践的な話し合い」の大切さを今後も提唱していく。そのために、特に年齢の若い教員、経験の浅い教員が「まずはやってみよう」「これならできるかも」と思えるような、簡易な手だてを工夫し、その有効性を検証していく必要がある。(視点2)
・時代に合わせ、また検証されたことをより一般化していくために、学級活動部作成「捉えておきたい『学級会』の観点」の内容を精査し続けていくことが必要である。(視点3)

◎ 児童会活動部 ◎

『よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす児童会活動』

1 発表者

- 渋井 洋子 指導教諭 (東久留米市立神宝小学校)
鈴木 敬太 主任教諭 (江戸川区立春江小学校)
星野 俊明 教諭 (江戸川区立春江小学校)
久木 優有 教諭 (立川市立上砂川小学校)

2 研究発表

(1) 研究内容

これまで児童会活動部で捉えてきた「人間関係」「社会参画(自己有用感)」「自己実現」は以下の通りである。

人間関係形成

よりよい人間関係を築くために、児童会活動では「上級生は下級生に対して思いやりの気持ちをもって接し、下級生は上級生にあこがれの気持ちを抱いて協力できる」ような、異年齢集団活動を通して、他の学年との人間関係を豊かに形成する力を付けることが必要であると考えた。このことは、児童の発意・発想を生かした活動に参画していくことで身に付けていくことができる。

社会参画(自己有用感)

『自分は必要とされている』『自分は役に立っている』と思える感情と定義し、それは他者に認められてはじめて得られるものであると考えた。このことは、上述の「人間関係」を豊かにすることと関連が深い。

自己実現

「異年齢交流活動の中で、『自分のなりたいたい姿』を目指して、全校のみんなのために、その活動の目的や意義を達成していくこと」と捉えた。このことは、上述の「社会参画」していく活動を通して、実現していくものと考えた。今年度は、全体研究主題「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす特別活動」を受け、以下の視点に沿って手だてを講じ、本部会の研究主題「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生か

す児童会活動」に迫ろうと考えた。

(2) 研究の視点

- ◇視点1 「みんなとともに生きていく力を育てる指導の工夫(人間関係形成)」
◇視点2 「よりよい集団をつくらうとする力を育てる指導の工夫(社会参画)」
◇視点3 「なりたいたい自分に向けてがんばる力を育てる指導の工夫(自己実現)」

3 研究の振り返り

(1) 研究の成果

視点1 (人間関係形成) メッセージボードを活用し、上級生への「あこがれ」と下級生への「思いやり」をもたせていくことが、よりよい人間関係形成につながる事が確認された。

視点2 (社会参画) 年度当初の委員会活動でオリエンテーションを行うことや、計画から振り返りまでの一連の活動を継続すること、児童の発意・発想を生かした自治的活動の場を保障することで、「全校のみんなのために」という目的や意義を達成する活動につながる事が再確認できた。

視点3 (自己実現) 提案理由を具体的にし、児童間で共通理解を図ることで、活動の目的や意義が明確になり、「(本部会で定義した)自己実現」を図ることにつながった。

(2) 今後の課題

視点1 (人間関係形成) 全校児童から収集し整理・分類した意見を全校児童に伝えることで、児童会活動の目的や意義を共通理解していくように、継続して指導を進めていくことが大切である。児童会のためを達成するための活動を積み重ねていくことが必要である。

視点2 (社会参画) 基本的な代表委員会や委員会活動の在り方(「児童の発意・発想を生かした自治的活動」の場を保障すること、「計画」から「振り返り」までの活動を一連の活動として捉えること)、活動に関する教員間の共通理解をさらに見直し、より多くの学校に広めていく。

視点3 (自己実現) 提案理由を深めることだけではなく、今後は、児童会のためでの活用、「思いやり」と「あこがれ」の気持ちの醸成、活動の振り返り(自己評価・相互評価)からもアプローチしていくことが必要である。

◎ クラブ活動部 ◎

『よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かすクラブ活動』

1 発表者

島田 泰子 教諭 (墨田区立曳舟小)
加藤 葉子 (元部長)
高島 誠教諭 (足立区立保木間小)
矢部 聡 主任教諭 (世田谷区立尾山台小)

2 研究発表

(1) 研究内容

クラブ活動は、異年齢集団活動の楽しさを味わい、自分たちの手で活動をつくり出すための方法の理解、人間関係をよりよく構築していくための相手を意識した思考力、多様な仲間の個性を受け入れ助け合ったり協力し合ったりして、よりよい人間関係を築こうとする態度といった、資質・能力を育てることができると考える。

また、自他のよさや頑張りへ気付き伝え合っていくことで、異年齢の人間関係を育み、自分たちのクラブ活動をよりよくするための課題に気付き、その課題を解決しながら、自分のよさや可能性を将来にわたって追求しようとする姿が期待できる。さらに、これらの一連の活動を繰り返していくことで、自己肯定感や自己有用感の高まりも期待できる。

本主題を設定して3年目となる今年度は、児童の自主的、実践的な取り組みを大切にしながら、これまでの研究で積み重ねてきた、毎時間及び年間の活動がよりよく展開されるよう指導の充実を図り、クラブ活動の目標を決める際に上記3つの視点との整合性をとって指導を行った。また、「パワーアップカード」の活用について3つの研究の視点での成長を実感できるようにした。ICTの活用については、これまでの手だてをより効果的なものにするように、情報共有や教師からの価値付け、計画委員会での指導にも生かし研究を深めた。

- 視点1 「みんなとともに生きていく力を育てる指導の工夫 (人間関係形成)」
視点2 「よりよい集団をつくらうとする力を育てる指導の工夫 (社会参画)」
視点3 「なりたいたい自分に向けてがんばる力を育てる指導の工夫 (自己実現)」

(2) 3つの視点の有効な手だて

- 視点1 「みんなとともに生きていく力を育てる指導の工夫 (人間関係形成)」
・めあての決定と可視化 ・クラブ通信の発行 ・よさの認め合いの工夫
視点2 「よりよい集団をつくらうとする力を育てる指導の工夫 (社会参画)」
・目標の決定 ・活動計画カードの活用 ・終末の助言の工夫 ・情報提供
視点3 「なりたいたい自分に向けてがんばる力を育てる指導の工夫 (自己実現)」
・めあての決定 ・クラブカードの活用 ・自分の成長を振り返る時間の設定
・児童理解を深めるための記録物の活用
視点の3つに共通する手だてでパワーアップカードの活用

(3) 検証授業

足立区立保木間小学校 ドッジボールクラブ
世田谷区立尾山台小学校 ノバドミントクラブ

3 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

- ①みんなとともに生きていく力を育てる指導の工夫 (人間関係形成)
・児童のよかったところを見付け、クラブカードに記入したり、活動の振り返りの中で発表したりすることで、異年齢の児童のよいところをお互いに見付け合う姿勢が身に付き、よりよい人間関係を形成しようとする意欲が高まった。また、ICTを活用し、電子ホワイトボードにも児童が見付けたよいところをアップしたことで、これまで以上に互いのよさを実感し活動することができた。
・教師が見取った活動のよさ、児童が見付けた互いのよさや可能性をクラブ通信で発行し児童に伝えることで、自他のよさやクラブ全体の成長などを児童自身が実感することができ、効果的であった。また、よいところ見付けをクラブ通信でも価値付けし共有したことで、よいところを見付けようとする意欲が高まり、異年齢の仲を深めることにもつながった。
②よりよい集団をつくらうとする力を育てる指導の工夫 (社会参画)
・一人一人の思いを生かしてクラブ全体の目標を決定し、毎回それを掲示したことで、毎回の活動の中で目標を意識した行動や発言が多く見られるようになった。また、終末の助言では、目標やめあてを意識して活動できたことや〇〇クラブの成長を意識的に取り上げ称賛したことで、クラブ全体の目標を達成しようとする意欲を高めることにつながった。
・活動計画カードを活用し活動計画を立てることで、自分たちの力で活動をつくり上げることにつながった。また、前時の成果と課題を生かし、次の活動をよりよいものにするために全体や司会グループで次時の全体のめあてを考え、活動することができた。
③なりたいたい自分に向けて頑張る力を育てる指導の工夫 (自己実現)
・毎時の個人めあてをクラブ全体の目標や全体のめあてのために決めることで、一人一人が全体の目標やめあてを意識し、個性を発揮しながら活動することができた。
・終末の助言では、児童自身が成長している実感をもてるようにするために、教師の見取りやクラブカードの振り返りから、個人めあてを達成したことを取り上げ、称賛を積み重ねることで、児童が自信をもって活動したり、他の児童のよさを見付けたりするきっかけになった。
④3つの視点全てにかかわる指導の工夫
・パワーアップカードを活用したことで、これまでの成長や努力を振り返り、さらによりよいものにしていくよう意欲を高めることにつながった。また、パワーアップカードを基に振り返りを行うことで、これまでの成果と課題が明確になり、次時へのめあてや活動意欲を高めることができた。

(2) 課題

- ・クラブ活動における人間関係形成・社会参画・自己実現を実現するために、共通実践として「クラブ通信」「活動計画カード」「パワーアップカード」の手だてを行い、取り組んだ。次年度さらに研究主題に迫るために、3つの手だての追究やICTの活用などの研究を深め指導していく。

◎ 学校行事部 ◎

『よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす学校行事』

1 発表者

竹田 桃子 教諭 (練馬区立上石神井北小)
伊勢 祐美子 主任教諭 (世田谷区立若林小)
平山 かおり 主任教諭 (目黒区立鷹番小)

2 研究発表

(1) 研究内容

学校行事には、みんなで力を合わせて、集団の力やよさを高め、自分や集団の成長を実感できる場が多くある。それらを実現する児童の育成を目指すために、まずは児童が今の自分を理解することが大切である。学級や学年、学校という集団の中で今の自分にできることを考え、めあてをもって行事に取り組んでいく中で、自分の役割を果たしたり、よさを見付け合ったりして、新たな自分に気付き、新たな可能性を見出すことができる。一つの行事を通して得られる達成感や充実感によってさらなる高みを目指したいという自信や希望につなげることができる。

今年度は本研究主題での3年目で、検証授業による理論・仮説の検証は2年目であった。これまでの研究で取り組んできた行事をつなぎ、身に付けた力を次の活動へと生かしていく過程を大切にしながら、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」を相互に関連付けて実践し、目指す児童像と学校行事で育成する資質・能力を明らかにしていった。

(2) 3つの視点の有効な手だて

- ◇視点1 「みんなとともに生きていく力を育てる指導の工夫 (人間関係形成)」
・児童の意欲を高める事前指導
・友達のよさを伝える時間の設定
・自分の役割を意識し、友達との関わりを深める係活動
・教室掲示・学年掲示板の活用
◇視点2 「よりよい集団をつくらうとする力を育てる指導の工夫 (社会参画)」
・友達のよさを伝える時間の設定
・自分の役割を意識し、友達との関わりを深める係活動
・スライドショーなどの資料掲示の工夫
・振り返りの場の工夫
・教室掲示・学年掲示板の活用

- ◇視点3 「なりたいたい自分に向けてがんばる力を育てる指導の工夫 (自己実現)」
・自己のよさを生かそうとする事後指導
・めあての実践を促す言葉掛け
・振り返りの場の工夫
・教室掲示・学年掲示板の活用

(3) 検証授業

10月18日 (火) 世田谷区立多聞小学校 伊藤 優 教諭
第2学年 学級活動 (3) 運動会事後指導
「運動会、広がる、つながる、かやく、みんなで`わ」
12月2日 (金) 世田谷区立若林小学校 伊勢 祐美子 主任教諭
第3学年 学級活動 (3) 音楽会事後指導
「虹のたねを集めよう 自分もみんなも全てを大切にする子 ~音楽会を振り返って、未来へつなげよう~」

3 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ◇視点1 「みんなとともに生きていく力を育てる指導の工夫 (人間関係形成)」
係活動を行事と関連付けたことで、行事前後も日常生活にある係活動を活性化することができ、みんなで行事を成功させたり、学校生活を楽しみ豊かなものにしたように意識が高まることにつながった。
◇視点2 「よりよい集団をつくらうとする力を育てる指導の工夫 (社会参画)」
各学校で異なる学校行事の内容や実態に合わせてねらいを立て、年間を見通しながら事前・事後指導を積み重ねたことで、行事ごとに集団への所属意識が高まり、人間関係を豊かにしていくこととめあてを立てるなど、よりよい集団を自分たちでつくらうとする意欲を高めることができた。
◇視点3 「なりたいたい自分に向けてがんばる力を育てる指導の工夫 (自己実現)」
自分たち一人一人の成長や学年で成長したこと、また成長を感じ取れる保護者からのメッセージを可視化したことで、自分たちのもつよさや可能性に気付かせることができ、行事後の日常生活でもそれらを発揮しようとする姿を引き出すことができた。

(2) 今後の課題

- ◇3つの視点全てにかかわる課題
児童が「なりたいたい自分」に向かっていることができるよう、手だてを考えた行事の事前事後指導をしてきたが、児童によっては、「1週間後になりたい自分」「次の行事になりたい自分」「10年後になりたい自分」「ずっと先の未来になりたい自分」と捉え方が様々であった。学校行事部として、「なりたいたい自分」をどう捉え、めあてや振り返りを考えさせていくのか、また、成果を実感できるような手だてはどのようなものがあるのか、さらに探っていく必要がある。

# 都小特活研究発表大会記念講演

演題 / 「よりよい人間関係や生活をつくり、  
自己のよさを生かす特別活動」

講師 / 文部科学省初等中等教育局視学官  
安部 恭子 先生



東京都小学校特別活動研究会が、長年に渡り、特別活動の実践を積み重ねられ、今年度60周年を迎えられたことを心からお祝いする。これまでの歴代の会長の先生方をはじめとする多くの方々のご支援があるからこそこの60周年だと思う。

東京都小学校特別活動研究会では、研究主題を4研究部で共通に据え、視点を揃えて3年間研究に取り組んでこられた。各活動・学校行事により特質は異なるが、特別活動で育成を目指す資質・能力は、全体目標に示したものであり、同じである。研究主題を共有し、それぞれの部会で手だてを工夫したことで、手だての有効性が検証しやすいと考える。

今回の発表をぜひ地域の各学校に広めていただき、東京都の特別活動のさらなる充実を図っていただくことを期待する。

### 学級活動部

学級活動は、議題の適切な選定や提案理由の明確化、計画委員への指導など、事前の活動の充実を図り、低学年から実践を積み重ねることが重要である。子供たちにとって一番身近な社会である学級・学校の生活の充実・向上に向け、事前から事後までの一連の学習過程を通して、子供たちの主体性を大切に適切に指導助言を行い、学校全体で資質・能力を育成してほしい。特別活動の各活動・学校行事の基盤となるのが学級活動である。学級活動で培った力を各活動・学校行事で生かせるようにしたい。

### 児童会活動部

新型コロナウイルス感染症流行下においては、異年齢の交流が制限された学校も多かったであろう。児童会活動を通して子供たちにどのような力を付けたいのかを学校全体で共通理解し、創意工夫して実践することが求められる。代表委員会と他の委員会を同時に行っている学校が多くみられるが、代表委員会を別の機会に設定し、各学級の代表者だけではなく各委員会の委員長が参加することによって、委員会同士の連携など、学校全体の取組がさらに活性化される。児童会活動は、子供たちが自ら学校生活をよりよくするために話し合い、実践する重要な学習活動であり、価値ある活動であるということを今後も広く発信していく。

### クラブ活動部

コロナ禍による教育活動の制限で、クラブ活動が最も影響を受けた。クラブ活動においては、オリエンテーションの実施、全体目標の共有、子供自身の成長につながる教師の助言、振り返りの充実などが重要である。子供たちの自発的、自治的な活動であることから、子供たちが自らクラブの目標や活動計画を立て、見直しをもって実践し、よりよい活動を目指して振り返りを次の活動に生かすことが大切である。各学校の取組のさらなる充実を期待する。

### 学校行事部

学校行事はコロナ禍で制限、縮小を余儀なくされた。一度、縮小したものを元に戻すのは、かなり大変なことだと思うが、行事のねらいを明確にして、学校全体で共通理解を図って推進してほしい。学校行事は、事前指導を工夫して実施し、子供たちに付けたい力を明確にして取組みを促してほしい。単なる思い出作りにすることなく、子供たちの資質・能力を育成するために行事が必要だということを今後も発信し続けていくことを期待する。

各部の発表により、誰もが実践できる具体的な指導方法が明確にな

り、初めて特別活動に挑戦しようとする先生方の意欲の向上につながり、道しるべにもなったのではないかと。今後はさらに、客観的な数値等も加え、子供たちの振り返りの記述等を分析・検証するなど、研究を推進してほしい。

個別最適な学びのためにはICTの活用が欠かせない。一人1台端末が実現した現在、ICTを効果的に活用することで、めあてや意見などの共有化が図られ、授業の質を高めることができる。しかし、ICTを活用することが目的ではないので、学習過程を見通して適切に活用することが大切である。今後も人と人の関わり合いを大切にしながら、特別活動におけるICTの効果的な活用を研究していく必要がある。

現行の学習指導要領は、2030年の社会を見通して作成されている。今はVUCAの時代と言われ、先が見通せない、理解できない、不確実で複雑な時代である。今後さらに少子高齢化が進み、生産年齢人口は低下し、求められる人材も大きく変化するであろう。そのような中だからこそ、特別活動の豊かな実践により、子供たちが多様な他者と協働してよりよく生きていく力を自ら付けていけるようにしたい。

令和4年度の全国学力学習状況調査の質問紙調査において、「自分にはよいところがあると思いますか。」という質問項目に対して、否定的に回答した子供が2割以上存在する。自分のよさに自分一人で気付いたり実感したりすることは難しい。特別活動における多様な集団活動を通して多様な他者と関わり合うことで、友達から褒められたり、先生から認められたり、今まで気付かなかった自分のよさに気付いたりすることができ、自己有用感や自己効力感の向上につながっていく。

また、「学校の友達との間で話し合うことを通して、自分の考えを深めたり、広めたりすることができていますか。」の質問項目でも、およそ2割の子供たちが、否定的に回答している。学級活動や各教科の学習で、学級や小グループでの話し合いを行っているにもかかわらず、そうした認識であるということは、話し合いが単なる意見発表会になっていたり、一方通行になっていたりすることが考えられる。友達の考えと自分の考えを比較して聞いたり、友達の意見につなげたりして、双方向の話し合いとなるようにすることで、学び合いになっていく。

子供たちが多様な他者と協働し、主体的によりよく生きていくためには、まず学校として育てたい資質・能力を明確にしなければならない。特別活動において「目指す子供の姿」を具体的に設定し、学校全体で共通理解を図って指導する必要がある。指導と評価の一体化を図る上でも、PDCAサイクルを生かして、振り返りを指導の改善に生かすようにする。

また、社会に開かれた教育課程の実現においては地域の人材の活用も欠かせない。ゲストティーチャーやクラブ活動の指導者、学校行事など、様々な場面で地域社会と連携を図るとともに、子供たちが生き生きと活動している様子を発信していくことも大切である。さらに、カリキュラムマネジメントの視点をもって、年間指導計画を作成し、各教科等や各活動・学校行事の関連も明記する。特に学級活動(2)(3)については題材だけでなく、ねらいを明確に示す。「キャリア・パスポート」を、学級活動(3)のどの題材で活用するのかを指導計画で明確化する。子供たちが自分で目標を立てて振り返り、次の活動や課題解決に生かすなど、学びをつなげていくことを意識してほしい。

特別活動の豊かな実践により、子供たちは多様な人との関わりの中で自分のよさや可能性を発揮し、学級や学校の生活を自らよりよくすることができるなど、これから生きていく上で必要な資質・能力が育まれる。教職員にとっても、お互いを共感的に受け止め、居心地がよい、心理的安全性が確保されている環境が大切である。

今後も東京都小学校特別活動研究会の益々の発展と皆さまのご活躍を祈念する。

編 集 後 記

会報112号をお届けします。公務ご多用のところ、ご協力いただきありがとうございました。

(関、鈴木(悟)、藤井、伊勢、関田、酒井(博))